

3・雲のような人生



落ち葉を踏みながら

遠くに行くことも出来ず、家の中から門前の道端に出て行くと、落ちた木の葉が踏まれてやさしい音を出す。秋の肌寒い風に吹かれてあちこちと飛ばされる褐色に変わった落ち葉は、生の終わりを惜しむのか、最後の足掻きで地面を掃き、吹き寄せられながらすすり泣くのか……もの悲しい声を上げている。

表門を開ける。塀に取り付き、計量器の筒の表示板に容赦なくへばりついて覆ってしまっている。剪定鋏で切った蔦の蔓は、切られても切られても次の蔓が元通りに伸びてくれ、塀全体に青色の着物を着せてくれたが、今は灰色に乾き、葉が一つ二つと落ちて道をさまよい吹き上げられ、踏まれた灰色の葉は惜しげもなく環境整理員によって収容されている。

寒い天気は灰色の冬の予報のようで、秋風がそよそよ吹くと言えば、いいえ冬の風ですよ……と口答えする。落葉を踏む感触は秋の未練を生き返らせる。そして冬の感触を強調してくれている……。

行く、倒れても

女房が外出から帰るなり、何をやる気もせず鳥肌が立って寒くて堪らないと言って、布団を敷いて横になってしまう。風邪を引いたようだ。応急薬の箱から薬を探すと、「バッファリン」があった。まずその薬を飲み、深夜電気のボイラーのモーターの回転を上げて部屋をもっと暖かくした。

1時間くらい眠っていると義妹が来た。寝ている姉に出掛けようと言う。するとポンと起き上がり外出の準備をする。「一体病人がどこへ行くんだ……？」と

聞くと、明日朝5時に車が出発するが、食事の準備をしなくてはならないので、市場に行って材料を買って来なくてはならないとのことだ。「どういうことか...?」と聞くと、江原道だかどこかに観光に行くという。そういえば、いつだったか5日に観光に行くという話を聞いたような気がする。寒いのに観光にしょっちゅう行くんだな.....と言って、暖かい服を着て、鼻も眼もみんな塞いで出掛けるんだぞ!と警告してやり、いずれにしても遊び回るのが好きだな...もちろん私も好きだけども!と言ったが、行って倒れても、行く所には行かねばならない。

今日も西の山に落ちて行った夕陽は顔を隠し夕闇が濃くなり、部屋に灯をつけパソコンの扉を開きたくなった.....。

秋の空と海の風景

昨夜は3時間しか眠らず睡眠不足のせいかめまいがしたので、朝食を済ませて直ぐ一眠りして起きると少し治まったが、どういうわけか暑く息苦しい。窓を開けると涼しい風が室内に入ってくる。その風は明らかに秋風だ。涼しいとは言っても肌寒い風だ。

私の目の前に展開している釜山港は、強い日光が、次第に港に集まってくる船を鮮やかに照らし、船は身じろぎもせず、写真に撮ったような風景だ。海の向こうの山は沢山のアパートや建物群を懐に抱き、私を眺めている。

山に抱かれている建物群は、空から灰を振りかけられたような暗い色をした憂鬱な環境の中で孤独さに耐えるかのように、裏山と空の灰色とは対照的に見える。青い空は、塊状に浮かんでいる白い雲によって、空と海の間で遠く水平線があり、すべてのものが死線で停止している感じだ。

だが今日は未明の線から静かに動きもせず、物音もせず静かな海と空そして山と水平線に至るまで、日曜日のせいか休んでいるように見える。だが生命は休むのは止めよう。生きてもっと活躍しよう。灰色に散らばっているあの雲は秋空の形成がまだ十分に行われていないようだ。海と空.....。

出発準備

私は複雑なことを避けながら生きて行きたい。名節*の山場に、ソウルから釜山まで交通混雑時に移動する必要があるか。平日暇な時に支障のない人がソウルに上京していたかね。でなければ故郷に帰るのを止めろと言ったりしたことがあるかね。その上、自家用車で10時間以上の運転で苦労させる必要はないのだ。墓参りにも秋収節（秋の収穫祭）の農村が忙しい時期に行く必要はないと思って10月に行ったが、草が繁茂していて歩くたびごとに草毒に犯され1ヶ月間皮膚科に行って治療を受けた。

今年はそんな関係で草が枯れて萎れるときに行ってみようと11月中旬に決めた。しかし都山所（大墓）は毎年伐草（墓の雑草を刈ってきれいにすること）してくれる人が、1800坪の墓地のうち1000坪程度を田を耕して生計を立てているが、それ以上墓地に食い入らないよう、除草機を持って行って墓地の領域を維持しようと思う。光州の弟と明日都山所で合流して作業をし、その次はサムドクリ……そしてプルム郡……ウォルホ里を巡回して墓参りする年中行事だ……都山所は私の八代祖父の墓地だ。族譜で見ると、厚彬八代祖父は武科判官の出で……祖母は淑夫人晋州姜氏と書いてある。都山所といえば、私の最も目上の人の山所（墓）ということの意味する。明日の朝早く出発する計画だ。5時間はたっぷり掛かる。家で飲食物を作って娘夫婦と我々夫婦が4人乗って行く。光州からは近い所だが、それでも3時間は掛かるのだ。弟と甥、義妹がやって来ると7人になる。そうすれば7人が都山所の広い芝生の上で昼食を食べながら伐草もし楽しいひと時だ。海南で一日旅館に泊まって12日に帰って来る。

今日はそんな旅行に出発する準備で忙しい。忘れ物はないか……除草機の充電……草刈鋏など色々の準備が必要だ。朴赫居世、始祖のおじいさんから族譜にアンダーラインを代々にわたり引いてみる。こうしてやらなければ子供達が探すのに骨が折れる。

訳者注：名節は重要な年中行事の日

カノッサの屈辱

ヨーロッパでは中世封建社会の確立とともにキリスト教が西欧一帯を教化し、ローマカトリック教会の権威は精神的なものから世俗的なものにまで及ぶようになった。それとともに協会は次第に腐敗し、俗化し、教皇の権威を脅かすようになった。特に962年ドイツ皇帝オットー1世がイタリアを併合し神聖ローマ

*

帝国の皇帝に上ってからは、教会に対し教皇よりも強大な発言権を持ち、司教の任免権まで持つに至った。これとともに協会内部からも改革運動は次第に積極性が目立つようになったが、1073年グレゴリ7世が教皇の位に上るや、俗人すなわち皇帝による司教任免を禁ずるといふ断固たる処置を取った。

それによって当時のローマ皇帝ハインリッヒ4世と正面衝突をすることになった。ハインリッヒ4世は自分の力のみ信じ、教皇の廃位を宣言するや、教皇はこれと対立し、ハインリッヒ4世を破門してしまった。この破門処置の効果は驚くべきもので、教会はもちろん諸侯と臣下達までも皇帝に背き、教皇側に立った。ハインリッヒは屈服を自覚し、カノッサにいる教皇を訪ねて行った。

折しも降りしきる吹雪を冒して、教皇の城の前で何時間も立ち尽くし許しを乞うた末に、辛うじて意を遂げた。この事件が史上有名な「カノッサの屈辱」として、教会の権威が世俗の最高権威まで屈服させることを示す特定の見本となった……。

ナクアン城の古跡で昔の想いに浸った

右水宮の墓を2日間も巡り、くたびれた体で帰路に着いた。10年なら山河も変わるという言葉は聞いたが、1年で山河が変わったという実感を切実に感じながら、雨粒が車窓を叩くのに気づかず、都山所(大墓)に来ていると携帯電話で知らせてきた弟の家族を思いながら気がせいた。5時間なら十分だった距離だが、道標も替わっていて尋ね尋ね探して行ったので、コダンまで一回りすることになり、1時間余分に掛かり午後2時に都山所に到着した。

雨は降るし腹も空いて疲れ果てた上に、作って来た食べ物を並べて座る場所も適当な所がない。都山所の芝生は広くて物寂しく、雨が更にひどくなるようなので、ちょっと離れた一家の墓に行った。乗って来た2台の自動車のトランクから飲食物を取り出し、墓の芝生の上に、持って来たビニールの敷物を全部敷いて、間に大型の parasol を寄せ合わせて立て、ソウルからやって来た甥がビニールの雨衣を着て、更に大きな傘を立てて、バーナーで三枚肉を焼いている。

やはり登山にも素質があるようだ。私は、雨が降っても慌てる必要のない万端の準備に驚いた。弟は光州で雨が降るのをすでに知っていて、万端の準備をして来たのだ。雨が降るといっても衣服がずぶ濡れになるほどではない。男達は座るとまず酒を飲む。女房と義妹そして娘は飲食の準備に忙しく、私と弟は酒を飲むのに忙しい。婿と弟の次男である甥は運転するため酒を飲まないとい

い、肴を作るのを手伝っている。この瞬間……！どんなに素晴らしく面白い瞬間であることが……！雨がもっと降っても心配ない。湿っぽく、体も心も濡れながら、墓参りが宴会場になって情緒に耽った「雨中の饗宴」だと言い、次はサムドク里。それからファウォンに行き引き返し、ブルム郡は明日に延ばして、新築した「グランプリ」モーターに投宿した。翌日はかなり遅くブルム郡に行き伐草して右水営で弟と別れ、我々の車は順天へと走る。

順天の近くに来て、「ナクアン邑城民俗村」という道標を発見した。時間もあるので一度見物してみようと言って、矢印の方向に奥深く入り込むとナクアンという村がある。そこは初めて聞く民俗村だ。ナクアン邑城民俗村（史蹟第302号）は、ナクアン邑城が現存する朝鮮時代の邑城の中で保存が最も良好な所なので、城内には伝統的な村がそのまま残っている。この邑城の特徴は、大抵の城郭が山や海岸に築造されていたのに反し、野原の真ん中に築造された平城として外敵の侵入を防ぐため、朝鮮朝太祖6年（1397）ナクアン出身のキムビンギル将軍が土城を築き、その後仁祖4年（1626）ナクアン郡守として赴任したイムギョンオブ将軍が石城に改築したと伝えられている。全体の姿は四角で、城郭の長さは1410メートルで、東、西、南方三ヶ所には城内の大きな道路と連絡する門があり、敵の攻撃を効果的に防御するための4ヶ所の支城が城外に突出している。城内には100余世帯の民家があるが、普通一世帯辺り2～3軒の藁葺き屋根の家と庭、敷地内の畑で構成されている。しかし現代化の波に従い伝統的な村の姿は変形し始め、城の一部が自然に崩壊、遺失するに伴い、1983年史蹟として特定し、邑城の総合的保存作業を始めた。特に百姓等が住んでいた藁葺き屋根の家のうち、保存価値が高い9棟を重要民俗資料として指定、一部変更したり古い家を復元修理して、官衙と客舎周辺の堀、越台、三門などを発掘復元して城郭と門楼、イムギョンオブ将軍の碑閣などを保守復元した！この隅、あの隅と観察し、昔の村の様子を調べる感覚で昔の飴も買って食べ、写真も撮って車で帰って来た。

再び車は順天に向かっているが、お腹が空いてくる。適当な所で食事でもしよう。とクムチという停留所の前で車を止めて、残った食べ物を食べてしまい……甥、孫が住んでいる順天へ到着した。5時になっていた。我々が昼食を食べていないだろうと思って食事の準備の最中だ。それで夕食には早い、6時まで夕食として一匙食べて家に帰ったが、9時になっていた。順天から持って来たもの、蟹、南瓜、薩摩芋などで、自動車のトランクは一杯だった。女達は、それらをきれいにしたり煮たりして2時になるまで作業し、すっかり草臥れて、すべての部屋は真っ暗になった。

期待は失望をもたらす

期待するのは欲目で、「盲想」だ。期待することは、事が99%達成されたものでも崩れることがある。私は最近、このように万事を信じることが出来ない。期待を欲目だと知って、「盲想」という新語のような表現をすることになったのは、万事が思い通りになることがないためなのか？今日は期待に反したことがまたあった。

眼鏡のレンズを、眼科医師が検眼票をくれて、この通り眼鏡店で作ればよいものと自信を持って信じていたのだ。話によると、0.6は眼鏡のレンズを取り替えれば0.8になるということだった。だが現に今日出来て来たレンズは0.6以上の効果はなかった。むしろもっと下がるようで口惜しい。

はじめは、白内障を手術すれば元来の1.5になるものと思っていた。それは愚かな期待だった。せめて0.8にはなると思っていたのだ。あれから乱視がひどい。こんなことを期待して夢を見ていたのだと悟った。期待はせず夢でも見ながら生きて行こう。

時間が過ぎれば

煩わしいことが大なり小なり多過ぎる。墓に行ってみると、うちの林野に許可なく墓を作る奴がいて、ある所では伐草もしない奴がいるかと思うと、うちの墓地に入り込んで勝手に田を耕している奴もいる。毎年行って見るが、こそこそ田を広げ、1800坪の墓地のうち、田が1000坪で、800坪が墓地となっているが、その田の収入で食べている人が毎年伐草をしてくれている。

ところで、僅か300坪にも満たない墓地を残すのみで葦原になっているのは、伐草をちゃんとしないでいたという証拠なのだ。ここを測量しようとすれば仕事ではない。測量をするだけでなく、柱を立てて鉄条網を張らなくてはならず、そうでなければ、やってもやらなくても同じことだ。

6500坪の林野は、3000坪程度が開墾され、白菜、唐辛子などの作物を栽培して生計を立てているが、前の山守が墓を個も作ってソウルに移住し、別の人に引き継いだのだが、毎年内容証明を送っても回答をしてくれない。こんな場合は、埋葬して10年以上になれば墓を使用した者に権限行使を出来ないのか？内容証明だけ送るのでは時効が延長されると言う人もいる。どういふことなのか？私は法律を知らないのだから気にしているだけだ。時間が過ぎれば

解決されることなのか？だめなら、誰かに売ろうとすれば3人の人が新聞公告を3度出し一掃してしまえばよいという話もあって、いらいらする。

一年に一度墓参りをするが、いつもこんなことで頭が重い。今年も重苦しい気持ちで行って来たが、墓参りの後は気持ちが軽くなった。それで、時間が解決することを切実に感じた。私が死ぬ日も、予め恐怖に震えることなく時間が来れば解決されると思って気楽に過ごせばよいのだ。

未明の帰宅

3時に電話のベルが鳴る。私は心の中でソウルに行っていた孫娘からの電話だと思った。土曜日に、孫娘の退勤する時間になったといていたので、孫娘から電話が掛かったとすると、姉の家に行ったのなら、今日会社に出勤するためには、夜行バスに乗って来なくてはならないからだと思ったのだ。

そんな訳で、呼び鈴が鳴ったとき時間を見ると3時半だ。下の孫娘が3時の電話で、父親に車で出迎えに来てくれと言う電話をしたと推量したが、表門を開けて出て行ったのは知らなかった。暫くすると2階に上がる音がし、その部屋の扉を開ける音がした。人の聴覚と感覚は鋭敏なものだ。官能と言うものは死ぬときまで健全なのが幸福のうちの一つだと思う。どの一つでも支障があれば不幸なことだ。

寝入っていて、周囲の動きを察して気がつくということは、時に応じて重大な事故を防止し、生における適応性を選びながら生きて行くことも出来ることになる。まだ孫娘は眠っている。7時半には家から出掛けなくてはならない。今は6時半……1時間の準備で十分だろう。朝食などは、私の匙で一匙分、弁当は私のジャンパーのポケットに入る程度の大きさだ。ダイエットをしたこともなく元来食事の量が少ない……。

勿体ない水がざーざーと流れて行く

蛇口が10個くらいあるが、水が力強く迸っている。我々はパガジ（瓢箪）で水を受けて飲む。冷蔵庫から取り出して飲む水と同じくらい冷たい。ここは海印寺の山奥から流れ下った水が、木の管を通して流れて来て大きな桶に集まり……こんなに多くの蛇口から水が出て来ているのだ。限りなく水は流れ下って

いるが、水を保有している山林はどこまで供給できるのだろうか？と心配もしてみる。

それで10個の中の3個は水が出ないように止めておこうか？と考えながら蛇口を見ると、全部、水を止める取っ手がない。だが山から流れて来て集められる水はいつも満杯で、それ以上あふれることはない。その時やっと私は、山から筒を通して流れて来て溜まる水の量と蛇口から流れ出る量を同じにするように、蛇口を止めるのだと分かった。最後にはこの水は何処まで行くのか？と考えながら、釜山では一週間に2回程度は人々が水筒を持って山水を取りに夜明けから山に登って行くことを思った。

水道水は飲むことが出来ず、洗濯と食器洗いをする水とっていて、飲み水は地下水か山水を飲めば安心だと認識していた。そのように、都市では貴重な水が限りなく流れ下っているのはもったいないことではないか？そんなことを考えながら私は八万大蔵経を20年振りに再度見物し、寺の境内を観察しながらぶらついている。宝物場の暖かい部屋で背中を曲げた後で、腰の痛みが少しよくなったようだ。釜山を出発した朝には雨が少し降っていたが、直ぐに天気回復し、日差しもなく程よい気候だった。

ところで今日も朝は雨が降った。やはり終日適当な気候だ。車は楽しい紅葉、緑葉、黄葉の三原色の間を縫い、ついに金海首露王陵が眼に入り、静かな昔の追憶が甦った。ここも20年振りのようだ。長生きしたから見られるのだ。何がどのように変わって行くのか？という好奇心が寿命を延ばすのだ。

共同浴場の話

私は明け方5時半に共同浴場に行く。誰もいない湯船の中は、私一人で独占することが多い。少し後で若い客が入ってくる。一人二人と入って来はじめ2~3人になるとき、40~50歳代くらいの人が入ってくると、まず怖い思いがしてくる。その人は入ってくるや、湯に中に入って行き蛇口をひねると勢いよく熱湯が迸り出て、瞬く間に湯船の中の湯の温度が変わってしまう。

私ははじめに入るときの湯の温度がぴったりなので、こんな熱い湯には足首を入れるのも嫌だ。湯船に入る前にはまず体を洗ってから湯の中に入るのが入浴の礼儀なのだ。ところで、いきなり湯の中に入ったのでは、共同浴場では他人のことを無視し礼儀に反することになる。私は浴室に入ると先ず体を流し、石鹸をつけて全身を洗ってから湯の中に入り、何分かしてから出て、湯船の中を何回か回って、再び湯の中に入って体を温める。何度か反復すれば50分ない

し1時間は掛かる。体の水気を乾かして衣服を着て家に帰る。体の水気が乾く前に衣服を着ると風邪を引きやすい。

我が家から左に行くと私の後輩が浴場をやっており、前の方に少し下がって行くと私の先輩が浴場をやっている。私は一箇所だけ利用すると良心に引っ掛かるので代わる代わる行って利用している。そうすると後輩はお金を受け取るまいとする。私は気の毒なので、やはり浴場をやっている友人に相談した。どうすればよいのだろうか…….という、そういう時は2000ウォンだけ出せばよいと言う。そうすればお互いに良いことだと言う。それから後輩がお金を受け取るまいとすれば、それでは2000ウォンだけでも受け取ってください…….といいながらお金を渡して帰る。前の方にいる先輩の方に行くときは、その先輩は私が3000ウォン出すと1000ウォンを返してくれる。こんな訳で私は入浴料が2000ウォンで済むという訳だ。

今朝は後輩の方に行って、友人達のことを聞き、今日の私の計画を実行する時間だ。

町営バスを信じて風邪を引きかける

我が家の前を通る町営バスは、ポプデを通り釜山銀行前を過ぎ、聖堂前を経て我が家の前という具合に一回りしている。所要時間は10分くらい掛かる。町営バスの料金は450ウォンだから、一般バス料金500ウォンに比べて途方もなく高いわけだ。しかし需要が少ないので別段利益は上がっていない。そのコースの道路は上がり下がりがあり、年を取った人には骨が折れるので乗ることになる。

しかし、この町営バスは需要が少ないため、勤勉にきちんと運行せず、ある所では待たなくてはならないかと思うと、ある時は早く来ることもあり、また全然バスが来なくて仕方なく歩いて行くことが多い。それで半分以上は客を取り逃がしてしまうのだ。今朝私が郵便局、釜山銀行に行って、用を済ませて帰るのに、町営バスに乗ろうと30分待ったが来ないので歩いて帰った。

家の前に来ると、やっとその時町営バスが通り過ぎたが、私は待っている時間に再び鼻が詰まって風邪を引いたようだ。走り去る15人乗り程度の町営バスの奴を白眼視して見送ったが……。

ブンオパン（鮎の形をしたパン）

我が家の表門近くにプンオパン店が開店した。なかなか美味しく焼けていて5個1000ウォンで売っていて、何遍か買って帰り家族みんなで食べた。ところで、幾らも経たないうちにその店はなくなって、今度は離れた大通りの曲がり角に別の若い小母さんが車を引っ張って来てプンオパンを焼いているが、ビニールで覆い埃が入らないように店を清潔にしていた。やはり5個が1000ウォンだ。私はそこを通るとき3000ウォン分買って帰った。家族は5人なので15個だと3個ずつ分けられると思ったが、全員1個食べ終わるとそれ以上到底食べることができず、残りは捨てることになりかねない。女房が3000ウォン分も買うのは無駄ではないかという。それは、私の考えでは幼い頃プンオパンなら10個食べても足りないくらい好きだったからだ。だが、私の味覚が変わったのかと思ったが、そのプンオパンとって売っているのは、油で揚げて作るのか油がぼたりぼたり落ちるので、その匂いさえもうとましいプンオパンだ。やはり幾らも経たないうちにその店はなくなり、聖堂前で町営バスを待っていると、門の直ぐ前の小さな店でプンオパンを焼いているが、これはちゃんと焼いて売っている。私は時々暗い真夜中に町営バスを待って1000ウォン分だけ買って家に帰る。数日前にやはり町営バスを待ちながら1000ウォン分買って、酒を一杯飲んだほろ酔い機嫌で家に帰ったが誰もいない。私はプンオパンを鏡台の前に放り出し布団を敷いて早く寝てしまい、明け方起きると、女房が昨日はプンオパンをあなたが買って帰りましたねという。私は私が買って帰ったようだ、そうだ、私が買って帰ったよ、何処にあるんだね... ..という、私が食べましたよ、有難うといいながら、あのパンは美味しいです。ね？

ネオンサインが花よりも美しい

(之)の字の形のようによるめき歩きながら通りに出た。華麗なネオンサインが私の心を華やかに恍惚とさせる。ここは何処だったかな.....?といいながら家に帰るのが心配になる。そんな程度なら心配することはない。正気を失っているのではないからだ。夜は東西南北も見分けがつかない私は、誤って反対側にかなり長い間歩いて行くことが余りにも多く苦労しており、誰にも話せない即ち蜂蜜をなめた唾になることが多い。今日は久し振りに酒を一杯やり同行者に脇を抱えられて帰って来た。私は今まで座ってご飯を食べ酒を飲んでいて、すぐ家に帰ろうとしたが帰る事が出来なかった。何処が何処か分からなければ

帰る事が出来ない！

歳月は移り、また移り行き、人生は一場の夢だが、何もせずにこのまま事を終えるのか？あと5年あればよいのか？さもなくば10年ならよいのか？と知らない人に聞いてみる。それは神でもなく人でもない！正に我が心だ。白寿は九十九才をいう。そんなに生きることができるかな？八十八才なら米寿と言う。短い8年と言えは瞬く間だ。だが1ヶ月と1週間の歳月が過ぎれば私は傘寿になる。傘寿というのは八十才を言うのだ。八の字に十の字を入れれば傘の略字になる。初めの米寿がまるまる8年を加えた八十八なら、8年が残っていると云うことか～～こう言いつつ今夜の私の課題として残しておこう……。

鍵屋

私はテレビでよく見受ける休戦ライン以北の人物達が、洋服や軍服に勲章を一杯吊るして行き来するのを見ると、過ぎし日わが国の田舎の市場でよく見つけた鍵屋が、全身に鍵を吊るして現れた光景を思い出す。何日か前に国際市場を通るとき、鍵屋が胸に鍵を一杯吊るして通り過ぎるのを見たとき、昔の思い出に暫しの間懐かしさが甦った。

以北ではないが、自分自身の功勞の満足の中で、そして夢の中で、勲章を一杯吊るし巷間で誇示することもストレスを解消する薬になるのだ。誰が何と言おうと、自分が幸福であることを自認すれば、それは幸福なのだ。客観的には、幸福だと言う自分が幸福だと思えばそれが幸福なのだ。

それで、不幸と言うものは本人が自ら招いたものだ。みんなが欲心から不幸を呼び込んでいると言うことは明らかなことなので、「人間は上を見て歩き、下を見て生きて行け」というのは、幸福を呼び、不幸を防ごうということだ。即ち、上を見て発展のために努力し、一方私より劣る人と比較しつつ生きて行けば、慰めとなり自分を幸福だと思わせるからだ。

年を取るほど、何も必要ないという気持ちが染み渡る。それは、死ぬとき持って行けるもの、持って行けないものが分かるからだ。それでも、直ちに必要なものまでも取り除くことは出来ない。ただ一日でも必要なものはあるのだから……ということだ。

わが国では、軍人も勲章を胸に吊るすのは、行事があるときは必要だが、平常時に重たい勲章を吊るして行き来はせず、略称を吊るして行き来する。紳士服を着るときは「勲章バッジ」を吊るして行き来する。鍵屋のように重たいものを吊るして行き来するのは見苦しく、よくない。

今日は日が昇らないようだ

朝8時だが部屋が暗い。窓を開ける。だが東の空が暗い。今日は日が昇らないようだ。東の空は濃い灰色の雲が空を覆っていて、太陽はその中に隠れていて.....出て来ようとしな。何が怖くて隠れてばかりいるのか？

今日は午後から気温が零下に下がり、今年に入って最も寒いのだと言う。雨が降り夜には晴れそして寒くなると言う。寒い暑い問題ではない。寒い時は寒く、暑い時は暑くなくてはならないが、暑かったり寒かったりがしょっちゅう繰り返されると風邪を引きやすい。一番怖いのは風邪なのだ。風邪は万病の根源だと言わなかったかな？ちょっとでも風邪気味であれば予め万般の注意をしなければならぬ。特に喘息にかかったらもっと用心しなくてはならない。今日は私も予め注意をして二度と風邪にかからないようにしようと努力している。

暮れ行く1999年は、過ぎた1年間の陰しく苦しかったことをいちどきに想い出させる。だが楽しかったことも時にはあったので、辛いことを少しずつぬぐってくれ少しでも慰めてくれる。風の吹くまま。希望は2000年にある。9の字はよくない年だという。だが私は9の字で勝ち抜こうと思っている。

湯気でくもったガラス窓

太陽が明るくなった。中の窓を開けてみるとガラス窓がゆらめいて泣いている。湯気がついて曇り流れ落ちて、外の通りと海.....そして遠くの山と家並みがゆらめきながら泣いている。門との間から冷たい風が室内に入ってくる。ガラス窓を開けてみる。今は前の道路や海、山、家すべてが笑っている。今日は天気予報通り寒いようだ。だが今日の通りの表情はどうだろうか？と想像してみる。

すべてのもの、出逢うことすべてが情愛深い心に満ちた楽しい日でなくてはならない。今日一日も人生の何分の一と言う惜しい時間だ。残された命の何分の一と言うもっと貴重な一日なのだ。張り合いのある一日は、この世から旅立つ日までの歴史となるのだ。ソウルから子供達が来た。この前空軍に入隊した孫が今日訓練を終えて帰って来るという通知を受けたからだ。数日の休暇を貰

った後再び何処かへ配置されると言う。そうすれば3年の軍隊生活に入る。国民なら兵役の義務を終えてこそ人間の本分を尽くすことになるのだ。国が大きく人口が多いからといって強い国ではない。小さくても国民の精神が武装され、不正がなくてこそ強い国になりうるのだ。

世界の様々な国の留学生達が、本国で戦争が起こったと言うのに、すべての学生達は留学で他国に来ていることを幸せに思っているのは、軍隊に行かず安全に過ごせると考えていたからだが、イスラエルの学生だけは急いで本国に帰ったという。国のために私が行かなくてはいけないという愛国心はその国を強国にするのだ。わが国では、その父母が息子達を軍人として送り出さないよう巨額の賄賂を使って息子が免役となるよう工作し、国を危うくしているのだ。今からでもわが国の若者達は昔の独立闘士を手本とし、勇気ある国民とならなくてはならない。

歓声

眼が覚め、暗い部屋で壁に掛けたデジタル時計が赤い明かりで時間を知らせる。真っ暗な中で私に語り掛けることが出来るのは時計しかない。2時だと教えている。鼻柱が若干冷たく鼻が詰まっている。しかし背中ほかほかして室内温度の上下の違いを明らかに感じる。腰を動かすと平素より痛む。きのうの夕方、バスから降りてゆっくりゆっくり暗い夜道を歩いて上がって行きつつ、暫く逢っていない懐かしい人達のことを思いながらいつもの家の前まで歩く疲れを忘れ、正に左に折れて行く瞬間.....丁度その時前から黒い二つの影の叫び声.....「おじいさ～ん」と男女の合唱でもするように私を呼ぶ。一人はソウルから帰ってきた孫娘で、一人は従兄弟の空軍に入隊訓練を受けて帰って来た孫だ。孫が走ってきて私の腰に腕を回しぐっと持ち上げ一回り回る。私は「あっ、腰が」と言ったが聞き分けはしない。その歓声にわずか1ヶ月余りとはいうが訓練で鍛えられた力の所産を感じながら、満足した気持ちで腰の痛いのを瞬く間に忘れて嬉しい気持ちを禁じえなかった。どこに行ってきたの.....?と聞くのに「スーパーに行ってきた」と家の中に入って私は直ぐに横になった。早く休みたかったのだ。暫くすると孫が私の寝ている部屋に入ってきた。「僕は寝ていても訓練されているけど興味ある.....?」といいながら、返事はどうかと聞き耳を立てているのも知らず.....ぐっすり眠って5時間経ったようだ。この文を書いているすでに1時間掛かったようだなあ。これが今日の始まりで、流れ行く時間を計る瞬間だ。横で眠っている女房の深い眠りに寝息を感じつつ私は私なりに三昧境に浸っているのだ。祈禱申し上げます。家族の健康と願い

が成し遂げられることを……そうして毎日眼を開ければ十五祈祷に口ザリオ祈祷をし、そしてこの文を書く1時間の間正座する。

見える日と見えない日

今日も太陽が西の山を越えて行くのか……東の窓は暗くなり、室内には灯をともし、外の道にはうすら寒い夕闇が迫り一日が幕を下ろしているようだ。祭祀を執り行なう今晚の準備に女房は今から終日台所で過ごし、2階の部屋には入って来る暇がない。私はぼかんと座って食膳に調べておくことを考えている。私がしなければならぬことは、屏風を巡らし食膳に差し上げる飲食物を運搬し、一つずつ配列して蠟燭を使って手順通りにやればよいのだ。しかし気持ちは忙しい。することがなく気持ちは忙しいということは何を意味するのか……まず亡くなったご先祖様に茶礼を差し上げれば、お出でになり召し上がるのか？

母が生前に、私が死んでも祭祀を行うことはない、聖堂に死者のミサを依頼するだけでよい、とおっしゃった。だが子供としての道理では物足りないのでそんなことは出来ない。暦を見る。今日と明日は矢のようにはやい。3日残っている今月はもう過ぎて行くのだなあ。眼に見える日は流れ行く水と同じに見える。しかし、暦を見なければ、水のように流れ行く歳月でも止まっているようだ。なぜ……そんなことを考えるのか？と自問しては、私が死ぬ日のことを考えるからだと自答するのだ。

このように速い歳月が、これから先あつという間に迫ることを予測するからだ。見える日より見えない日をもっと怖い。私の周囲の現在の親戚達が洗濯紐に鈴なりに掛かっているみたいで。十分に成し終えることは骨の折れることのように。

石頭は死ぬ前に生まれるな

元来私は頭が悪い。余りにも無我夢中で複雑に生きて来たのでそうなのか？頭が腐ってしまったようだ。たった今したことも忘れてしまい、それを直すことが出来ない。死ななければ直せない。日本語にもあるではないか！すなわち馬鹿は死ななきゃならない。こんなことを考えながら今、掲示板で読んだ辛

永生さんのことを思う。全国の郵便番号を暗記しているとは驚くべき老人だ。そして、その方法を習いたかったが、今思うと私は到底自信がないことを認める。たった今した事を忘れたことがないだけでも幸せなことだ。

私は近頃こまごまとしたことがとても多く、しょっちゅうすべきことを忘れてしまう。それで今日やることは昨夜眠る前にメモ用紙に書いておかななくてはならず、今日は距離が近い所から仕事を見ながらチェックして出掛ける。そうしないと抜ける仕事があるので……ということだ。今日もインナさんの所で勉強をして何時間もやってみたがうまく行かない。紙に詳細に書いておいて、それを見ながらやってみてもうまく出来なかったがやっと成功した。

灰色の冬は釜山にでも来て

背中が温かく安心してトイレに行ったがかなり寒い天気だ。江原道の山には雪が沢山降っただろう？きのうも外出しようとしてパジ（ズボン）は中に毛のついたもの、上着はあひるの羽毛の服を着ていたが、これだと寒い冬でも室内ではパンツとランニングだけ着ていても暖かいのが私は気に入って、いつも楽しんで着ている。時間は明け方の2時だから寒い空気に油断すると風邪を引きやすい。

だが熱い湯で頭も洗い、洗面も終え、すでに眠気も覚めたので、ひとこと笑わせたいけれど笑わせる種がない。きのうは外出しようとして厚いパジに、あひるの羽毛のジャンパーを着て出掛けようとするとうちが口を極めて止める。みっともない、そんな格好で出掛けてどうするのよ……！といってもあひるの毛の服に皮ジャンパーを取り出して着ることも出来ないし、去年ソウルの現代百貨店で一大決心をして買ったオーバーは余りにも早く、仕方なく純綿のジャンパーを着るほかなかった。だが暖かくなりえない弱い体になっていて、仕方なく肌着をしっかりと着て武装した。

今度ソウルに行ったら百貨店と南大門市場をくまなく回って見なくてはと女房と話した。二人が一つずつ買って着ればあわせて10歳は若くなりますよ……と望みを掛けるのは私より女房の方だ。女房は服のことになると口がハムバーグほどになるが……ハハハ……買ってしまえば何万ウォン分は着もしないで……何十万ウォンもすっきりしないが……30年前の服を今も着て出掛けると友人達が言うには、お姉さん、新しい服をまた買って着たの……？と言うそう

だ。
高級品はいつも新しいものに見えるよ……といえは満足な気分なのだ……
「青年は未来に生き、老年は過去に生きたと言っていた」その言葉は正しい……

...幾らも残っていない老人が未来を語ってみよう.....信じられもしないさ.....
青年だったら知らないが~~~毛のついた服はこれから流行を席捲するよ~~~
~中は毛になり外側は皮が毛に取って替わると滑らかだ.....!こんなことを思
って今年の冬の寒さを乗り切ることを考えている。灰色の冬は深まり行き、老
衰の不安が募って行くが、適応した生活に十分に没入しなくてはならない。

裸木

バッカス薬瓶に洋酒を入れて来たのをカバンから取り出し一口飲み、肴は落花生をつまんでいるが無感覚だ。もう一口飲むと初めて腹の中に反応が出る。車窓の外には山と木と後に走り去る家が見える。どこかに着いたな.....と思っ
て表示板を見ると清道駅だった。暫くの間降りる人は降り、乗る人は乗って、
再び列車は走り出し、近くの山には木の葉が全部灰色に変わり落葉して裸木の
林の中はその間が遠くまで見通せた。遠い山の松林は依然として鬱蒼としてい
る。作って来た海苔巻きとチャム(焼酎)の水割りが出て来る時は12時過ぎの
昼食の時間だ。女房が肴を出してくれる。水割りをちびちび飲んでいるのだが、
どうしてこんなに焼酎の味が苦いのか.....?

昼食を終え本を取り出して読んでいると眠気を催してくる。やはりアルコールの影響のようだ。ついにソウル駅に到着し、地下出口から出ると、下の婿と娘が出迎えに来て嬉しがる。三成洞の娘の家に行つて我々を降ろしておいて婿は会社に行かなくてはと直ぐに出掛けた。暫くすると再び帰ってきた。生鱈を買つてきて明日にでも美味しく料理して、おかずを作るのだと言つて会社に行つた。夜になった。テレビを見ていたので時間が経ち12時になってペンを執る。

霧の中に隠れたビル群

南向きの窓からの日光が春日和のような暖かい天気だ。だから家を建てるなら南向きにしろという言葉を実感する。窓際の椅子に座つてペンを執ると安らかな気分だ。5階の居室の南側の全体がガラス窓なので展望が良い。空は霧が立ち込め、聳える高層ビルは薄い雲の中からそそり立つ形となり絵のようだ。女房と娘は運搬してきた「大根」を整え、漬け込み準備が始まっている。私はテレビを見ながらこの文を書いている。李承晩時代から4.19革命と5.16革命

が放映されているのを見ると、過ぎ去った歳月が夢のようで、たびたび右側の窓の外を観察する。貿易会館が近くに見え、サンアアパート村が眼を退屈させない。6階の孫娘の部屋に上がって行くと太陽熱とボイラー室がいつも温水の供給を果たしているのが心強い。

6階の孫娘の部屋に置かれたコンピューターは5階の孫の部屋から移したもののだが、大学1年の孫が取り扱いに失敗して故障していると言う。何でも出来るとばかりコンピューターを分解したままだった。私はセロムデータメン*を入れて使用してみようかと思っていたが、故障中だというので失望した。数日後、長安洞の息子の家に行ってそこでやってみよう、と断念した。

訳者注：*は通信ソフトの一種？

夜空の下曲がりくねった山道を

家族6人全員が自動車に乗り薄暗い道を走っている。しかし、時間は夕方6時になっていなかった。行く先は京畿道広州郡にあるあひる肉の美味しい食堂だと言う。私は今日の昼食を2時頃美味しく沢山食べたので夕食は食べたくなかったのだが、婿が家族全員で外食しようと言うので、私は前に乗り、家内と娘そして孫息子、孫娘の4人は後に乗った。自動車はダイナスティに乗れた。暗い夜道だが週末のため車が滞る。ついに山道、野道、曲がりくねった一筋道を走って山奥の寂しい所に来た。一軒の家に灯がついていて、すでに自動車が1台駐車していた。こんな所に客が来ることがあるのか……？という婿が言うには、昼は席がなくて待たなくてはなりませんとのことだ。

村の食堂は部屋が幾つかあって、既に来ていた客は一家族の様子だ。夫婦と子供2人だ。週末を楽しむ40代の家族だ。我々は内側の静かな部屋を選んで席を取った。運ばれてくるあひる肉に、幾種類もの品も沢山出て来る。夕食は食べなくてもよいと思っていた私も美味しくよく食べた。

家を出るときは雨が少し降っていたが、今は晴れて、楽しい家族と外食することが出来た。帰りには南漢山城を通過して行こうかと思ったが危険な夜道なのでコースを変えるのは避けることにした。通行する人や車はいないので、山賊は出ないだろうが丘が多い山道で事故が起きたら困るからだ。家に帰ると夜9時になっていた。今日の楽しい外食で通った道は道端に華麗な豆電球が木に装

*

飾され、建物の形をした「ネオンサイン」で、夜の舞台に出演するスターの名前が沢山並んだ看板が、あちこちで競演するかのようによく客を呼んでいるようだ。こんな今日の私の行動は今頃何処へ行っても毎年のことだったが「夜空の山道をくねくねと走りながら」の楽しさは初めてのことだった。

暦

IMF 後、去年から暦が貴重なものとなり、時によってはお金を出して買わなくてはならない場合もあった。以前は毎年年末になると、集会でも職場でも暦を荷造りして送り届ける騒動があり、一抱えずつ貰ってくる一方、郵便局が忙しい時期だった。各家庭でも気に入った暦だけ使用し、その他は全部捨てる不経済は勿体なかった。今年は去年より少しましなようだと思うが、セマウル金庫や大企業から送られてきたもの以外には作らない様子だ。

近頃は暦を作るとき、陰暦を省略するとか、簡素に暦のページの初めの欄と初めの一日程度だけ載せるのみで、あとは省略するので一般家庭では不便だ。まだ陰暦で誕生日だとか祭祀日などを見るなど陰暦が多く使われている。それで陰暦がない暦が好まれないのは、老人達はもちろん若い層にも、祭祀を執り行なう身内や父母の陰暦誕生日が分かり易くて良いということだ。暦を貰ってくると、うちの女房はまず陰暦があるかどうか見る。陰暦がなければ投げ捨ててしまう。私もやはり同じだ。私は新しい暦に前以て家族の誕生日と祭祀日に印をして置く。そうこうするうちに、どの年だったか女房の誕生日に印が落ちていて大騒ぎになったこともあった。そのように暦に陰暦の有無が大きな比重を持つということは、経験してみれば理解できる。我が家の暦は部屋ごと空間ごと私が掛けておくと、娘が後をつけて歩き回り外してしまう。私は便利さのため、娘は壁に掛けるのを嫌うからだ。甚だしくは時計を掛けておくのには制限がきつい。必ず必要な所にだけ、時計も掛け暦も掛けなくてはならぬ娘の考えも一理がある。私はやたらに便利なことだけ考える。使って余ったものを私は捨てずに溜めておくが、娘は全部捨ててしまう。やはり性格の違いだ。

それ故、居間には絶対に暦は掛けず時計だけ 1 個掛ける。食堂には時計と暦を掛ける。各部屋にも時計を掛けない。ただし卓上時計は置く。だが私の部屋には、小さい部屋に壁時計が 2 個、暦は 2 枚掛けて置く。それだけでなく、写真の額縁は家族写真など沢山掛かっている。私のことを、お父さんは何でも壁に掛けるのが好きだ、と言っている噂を聞く。今日も新年の暦を掛けるのだが、

若干の神経を使いながら考えている。

漬け込み

天気が寒くなる頃すべての家庭では漬け込みの準備をする。寒さの前に漬け込みをしておくのと直ぐ熟して食べられなくなるからだ。それで近頃は電気キムチ瓶が現れ、少しも変質しないように調節するという。しかし漬け込みの時期にあわせて行うのは別の理由がある。冬至中にキムチの材料が一番良いのが出回るの、それも時期にあわせて漬ける理由なのだ。

30～40年前のことに過ぎないが、漬け込みは1年間の家庭の農事で、白菜100株から150株を土に埋めておいて、夏にも少しずつ取り出して食べる。うまく埋めておけば1年間すなわち次の漬け込みの時まで食べることが出来た。5.16の後ではセマウル運動でもビニールハウスが出現し、年中野菜が生産され夏のキムチも心配することはなく、沢山漬ける家も30株で十分になった。

我が家のような場合、5人家族でキムチを好むのは3人だ。それ故15株なら十分だと言う。そして電気キムチ瓶に入れておき、夏でも食べられる。家内が漬け込みをすると家族は名品だと思っている。息子、娘は勿論、婿達はそのキムチ以外のキムチは食べない。それで毎年子供達の家を歩き回りながら漬け込みをしてやっているそうだ。日本人はニンニクを見ると、蛇や百足を見るようで？叫び声を上げながら逃げて行った。

しかし今はキムチをよく食べるそうで、人の味の好みも変わるようだ。そして地方により漬け込みの方法が違い、塩辛が問題となる。全羅道のキムチは片口鰯漬で漬け込む。本当に塩辛を上手に作ろうとすれば、漬ける生の塩辛が2で、煮た塩辛1の比率で配合する。ソウルの漬け込みは海老を主とするという。おおよそこのような漬け方で作るのだが、日頃食べるキムチはその地方ごとの食生活の習慣になっていて、味を比較することは出来ないが、一度くらい他の地方のキムチを食べれば珍味が分かるようになる。今日は我が家で女房と娘が漬け込みをして苦労しているが、よい味に漬かって家族全員が喜ぶことを望んでいる。

寒い北風が耳を叩いても

冬だからか。寒い北風が吹き、鼻柱は凍り耳を打とうとも冬は冬なりに楽しい季節だ。冬になると、早く夏が来れば生きた気がするのにもということもある。だが夏になると、早く冬が来ればよいと思う。あれもこれも嫌なら、いつも春日和の国に行けばよいのではないか……だがいつも春日和だと、人間の性分が寛大になるとはいうが、抵抗力がなくなる。そして寒い時の体と心の鍛錬……夏には暑さを忍耐力で勝ち抜く性格を生かせばわが国の気候が最もよいと思う。

それ故、わが国民は小さな領土に優秀な人が大勢出現したと思う……そんなことを思いながら明け方の道を歩いて行く。北風が耳を叩き、鼻柱は凍てつき体を縮めて歩いて行く。毛の入ったズボン、あひるの羽毛のジャンパーを着ているので寒くはないが、襟首の防寒をしていないので、首を縮めている。道の途中でポストに郵便物を入れ、横や下に映る影の動きを注視する。流れ去った昔を思い出すと、山道を明け方の4時に歩いて一等岩まで登って行った初等学校時代に、暗い山道が、昔だったら虎がいたであろうが、何も怖いことはなかった。鬼神が出て来たら怖かっただろうか？手には電灯を握り締め、厚い服を頭まで被り登っていった。幼い時と年老いた時の抵抗力にはやはり幾らか差があるだろうか……だが幼いときがうんとまじだ……！と思いながら、とにかく歩いて行く。

女の気持ち

女は生活に麻痺してしまったのだろうか……？経済に対してはあらゆる神経を集中しているようだ。食料品の購入もどうしても必要なものを必要なだけ買う。だが例を挙げると、タオルが、誇張して言えば100枚以上あるのだ。長い間に貰ったタオルをぎゅう詰めにして隠しているので、トイレの外にうず高く積み重ねられているタオルを見ることも出来ないが、雑巾にもなるタオルを出して使えばどうなのか。台所やトイレの外で手を洗っても拭くタオルが見付からない。惜しくて使わないのだろうか……？面倒なのでそうなのだろうか……雑巾だと言っても私は新しいのを使えば気持ちがいいと思うが、手を拭く手拭がなければズボンか何かで拭うのが普通だ。

こんな不便さを知らないのさ。しょっちゅう言っても効き目がない。忘れてしまうのだろうか……黙殺してしまうのだろうか……女の気持ちは分からない。若かった時はきちんきちんと全てのことをこなして来たのが、年を取るとみんな損なわれてしまう。お前はお前、私は私と気持ちが変わったのか？分からないのは女の気持ちだ。

私は今日外出し、帰宅の途中「ラーメン」を何種類か買って帰った。私はラーメンが好きだ。特に辛くてぴりぴりするのが好きでピリ辛ラーメンを10個、そして残りは均等に買い帰宅した。20個をはるかに越えるラーメンを買い台所に放り出し2階に上がった。家には誰もいなかったからだ。こんな風を買って置いても、私は1, 2個食べたただけでなくなってしまう。ラーメンを家族の中で好む人が多いようだ。だから私は供給者で、消費者は別にいるわけだ。今ではしょっちゅう買って置いて家族達を喜ばせている。

枯葉が乱舞する通りで

自動車が道を塞ぎ長蛇の列をなし、交差点ではどうしてそれほど時間が掛かるのか、かんしゃくが起きる状態だった。町営バスに乗るつもりで、バスから聖堂前を注視する。町営バスが止まっているのを見て今日は待たなくても良いようだと言ったと停車ベルを押した。町営バスと並んで、バスは滞る車に塞がれて止まっている。しかし町営バスはバスを追い越して行ってしまふ。

私はがっかりだ。20分間町営バスがまた来るのを待つことは出来ない。歩いて行こう。そろそろと歩いて行けば15分あればいい。給油所の前で降りて歩き始める。風が強く吹く。歩道には枯葉が積もり、時折突風に乱舞する。埃が舞い上がり眼に入った。私は顔を手で隠す。道路面は枯葉があちこち塊になって動き回りながら地面の埃まで一緒になって行き交う人々を苦しめる。

これが冬なのだ。1が2になり、2が4になる悪党たちとは正にこのことだ。私はこんな冬でもなく秋でもない中途半端な季節が嫌いだ。雪が降り冬の風景になったほうがむしろ良いのではないか！と思いつつ私はテクテク歩いて草臥れもせず家に帰る事が出来た。

夜明けに見知らぬ広場で

暗い広場は見知らぬ所だ。昼間見れば何度か来てみたので見慣れたところだが、暗いときは見知らぬ冷たい風が吹く人気のない空間だ。私は歯ブラシで歯を磨きながら何かを探している。水道水の蛇口を探しているのだ。小さな広場は凍り付いていてうっかりすると滑るところだ。だが水道水を見つけても、うんと冷たい水が口に入れば歯がうずいて我慢できないだろう？と心配になる。

まず温かい湯はないだろうか？と考へて、板の間に上がる所に赤い明かりが闇の中で輝いているのを見つけた。

コーヒが出る自動コーナーではないか……と近付いてみると、またその横に水飲み場があり、温かい湯と冷水の二つの蛇口があって紙のコップが置いてある。よし、しめた。湯を受けてみると温かく横の冷水で温度を加減して口をゆすぎ歯ブラシも洗った。私の習慣は眼を開けさえすればまず歯を磨くことだ。暖かい黄土の部屋から起き出すと体が軽い。夜寝そびれたことは関係ない。寝が足りなければ次の日昼寝すればよいことではないか。心配することはない、と独り言を言う。少し前に外に出て、真っ暗な道を用意用意して歩いて来たが、ぼっかり凹んだ所で転んだことを思い出して苦笑する。誰もいなくて幸いだったが、幸福と不幸は自分にあるのではなく、他人が「可哀想だ」と思うこと自体が不幸なのだ。

万一私が転んだことを人が見て、あー可哀想に老人が転んだ、と可哀想に思ったらどうなつたろうか？というのが私の気持ちだ。雨が降るとしよう。私が傘がなく雨にすっかり濡れて道を歩いたら、人は私を見て傘もなしに水に溺れた二十日鼠のように哀れだな、と言えは不幸なことだ……といつても他人のために生きて行くのではない。私のために考へるのだ。こうして今日も私のために考へる一日が始まる。

正午になつたが

私は窓越しに果敢ない思いで遠い山を眺めているだけだ。数多く林立するアパートの中では、蟻よりも小さい人間達が食べて生きるべくうろついている。だが、アプトー（痛い〜っ）でも所有しているあの人達よりもっと劣る、家がなく野宿している人がいるが、この寒い日に死にもせず生きて行けるのだろうか？という果敢ない思いが頭を離れない。私は明け方の釜山駅からソウルに行った時のことを思い出す。

旅客が座る場所に野宿者が寝転び占領していてもよいのだろうか……？だがそこも占有できず床で寝ている人もいた。椅子の上で寝ている野宿者と床で寝ている野宿者の差別は、このような野宿者の社会でも上下の差別が存在することを示している。床から頭のとっぺんまで大きな差別があるのは、軍隊に入隊すると飯一杯の差で力の出し具合が違うという話を想像する。人間生活は千層、万層、九万層というが、細分してみればそんなものだ。

一つの席で洋酒一杯が万ウォンなら、この場所では洋酒一杯の値段は万ウォ

ンから 100 万ウォンの価値があるのではないか……！こんなことを考えると、今日の暇な家のお守りで私も万ウォンを儲けることになる。出掛ければ万ウォンが飛んで行ってしまうからね。

雨が降ったのも知らないで

今日は一日中静かに過ごそうと部屋の中でテレビも見、コンピューターもやり、友人達の名簿を作ることを思い立ち、先日作った名簿がその間に修正するものが多く見付かったので、貯蔵しておいたディスクを修正しようと探したが、内容が消失してしまっていてディスクが不良だと分かった。仕方なくプリントしておいたのを見てもう一度作ろうと終日編集をした。そして小さな手帳を完成した。率直な話、こんなことをせずに過ごすのは面白くない。私は終日家にいるとき手が静かにしていない。何かを作るとか玩具に触れるとかしなくてはおられない。昼には餅だとか熟柿を食べたので、食事をしようと思わずそのまま過ごしたが、夕食時になって空腹感を覚えた。夕食を食べながら、今日雨が降ったのを思い出した。

明け方、私が聖堂へ行く道が濡れていたの、夜中に雨が降ったのかなと思ったという、昼にも雨が降ったと言う。そうすると、私が部屋の中であれこれ手作業をしているうちに、外で雨が降ったことを知らずに過ぎたのだな……と思い、一日中過ごしたことを年初からまた一日が無常過ぎた……と思い、一日は一年の 365 分の 1 だが……1 日と今日の 2 日は 182 分の 1 だと思うと、分数で計算すると一日は惜しい時間だ。老人の生命を鋏で切り取るような時間の進行は切実に惜しいことだと思う。しょっちゅう倒れる同僚を見ても他人のこととは思えないからだ。目に見える殺人……目に見えない殺人……すべてが人生の寿命を狙っている恐ろしい刹那だ。

2000 年と言っても変わった事が出来るだろうか……大きな喜びの年だといっても誰を信じなくてはならないのか……この世の中では信じる人は一人もいない。無情の連続だ。自分を生かそうとし、他人の面倒は見るのか。面倒を見なくても良いから、労わるように見せて害することさえしなければよいのだ。父母は別にして、子供も兄弟間も同じだ。むしろ他人が情け深い場合が多い。子供達が父母の手助けをすることは少なく、父母の財産に惑わされ分けようとする場合も多いという話しだ。他人なら露骨に財産を狙うことはないのだ。難しい世の中……それでも新年には我々元老人達はこだわることなく落ち着いた気持ちで健やかに 365 日から 2 日を引いた 363 日を幸せに生きて行き給わんこと

を。

不安な思い

今日は10～30ミリの雨が降るとの予報だった。数日前に友人が久しぶりに今日の昼食に招待すると予め約束がしてあった。それで今日の昼にはその友人の店で老夫婦が私のために昼に食事を作るのに苦労するだろうなぁ……と思っていた。久しぶりに人を招待すると言うことは、食堂に行くのなら日を延ばすこともあるが、自分の店で作るというのは予め材料を準備するため、最近の習慣としては骨の折れることだ。そして、招待を受けたとき、延ばすとかほかの口実で断るときには本当に招待する人の好意を無視することになる。それで私はそんな目に会ったときには今後その人との連絡を断絶してしまう。

例を挙げれば、ある友人に昔洞長を勤めた人がいたが、在職中は本当に私に親切に接してくれた人だ……その方が定年退職し1年位後だったか、ある日突然その人のことが頭に浮かび電話を掛けた……ちょうど電話の連絡が取れ、昼食時に会おうと言うと、先約があると言う。それならいつでもいいから時間があるとき会う約束をしようという……私は毎日忙しくて時間がありませんと言う。そして私が知る限りでは、この人は定年退職後は毎日友人達と「ソツタ」(花札賭博)をして過ごしていると聞いた。いわば「賭博」を趣味とする生活のようだった。自分の趣味が何であっても夢中になっていれば忙しいだろうよ！そんな人は我々がしているコンピューターを……することがなくて、目にも有害でお金がうんと掛かるコンピューターなどする人は魂の抜けた人だ……みんな自分なりにだが……自分の趣味が第一になるのだ。

雨が降れば庚辰新春だから春雨だな……！と情緒的な気分になる。しかし昨日の昼、佳亮総務から釜山日報で電子会議取材するので1時までに情報センターへ来るよういわれたが、時間の都合が悪い。だが今日の掲示板を見ると時間がなければ家でも電子会議に出席すればよいというので、それでもよいのかな……？と考えている。それも難しいことのようなので全員が理解してくれることを望む。やはり不安だ。

雨降る夜

夜中にトイレに入ると水が流れ落ちる音がする。水を洗面器で使わなくても、水が流れ落ちる音がすれば雨が降っている証拠になる。雨が少しでも降っていると、屋上の水が流れ落ちている音がトイレで聞こえるようになる。今朝はそんな音は聞こえなかったが、明け方窓を開けると車が停車していて車のガラスが雨に濡れ、道が黒く濡れているので明らかに雨が夜明けまで降ったりやんだりしたようだ。

今日の私の計画は若干変更するしかない。今日は外出して友人と会おうかと思っていたが駄目になったようだ。約束したことではないので関係はないが、それも時間計画に蹉跎が生じたことになる。それでは家のなかでの作業をするしかない。

この雨は春雨に違いないが、雨が上がると寒くなるとの予報だった。寒かったり、そうでなかったりとの関係はないが、一つ心配になることがある。数日前と同じく水道水が凍れば、屋上タンクに上がっていかなくてはと思うと全く頭が痛いことだ、と朝から予め心配事を考えるが無用なことなのか……？夜の雨は静かだ。静かな雨降る夜だった。やはり春雨なのか女性的な雨だった。新年に、21世紀の始まりの、更に希望に満ちた年を迎え、情愛深い友達を思い、生きて行く上での懐かしい心を強く甦らせようと思う。

生きていこうとすれば一日も心配のない日はない

昨日の夕方、天気予報で今日から気温が下がり全国で零下になるとの事だった。零下になろうがなるまいが、服さえ暖かく着ていれば心配することはない今の世の中だが、何か心配になり、そうなのかという次第だ。私も心配することはないのだが、毎年零下10度以下に下がると、1年に一度くらいは屋上のタンクに水が上がっていかず不便だとは言うものの神経を使うことはなかった。ところで今年は零下4度程度で市水道水がタンクに上がっていかずやきもきする。仕方なくホースでタンクへ上げようと、寒いのに苦労することがあり、それでノイローゼになったようだ。零下になったのでそんな心配が生ずると言うのか……と考えながら心配している。何でもないことで神経を使っていることを分かっているのだが、安心できない気持ちだ。

だから一日も心配のない日がない人生を自分で作っている。昨日セブランス病院のユンバング教授の健康法を暫く聞いたが、人命在天・健康在我と言った。このような気分で生きて行けば健康になるといい、生きるだけは生きなくてはならない……100歳まで生きようとするなといった。健康に生きて70歳まで生

できればよい。90 歳まで、体が自由に動けず、他人の世話を受けて生きるのはよくない。強壯剤と言うのは健康になり長生きできるものと思われているが全部役に立たないものだ。

1) 三度の食事を均等に良く食べる。2) 酒は適当に飲む。3) タバコは絶対にあらずわない。4) 睡眠は6時間。5) 運動は適当にする。6) 間食はしない。7) 一年に一回は病院に行く。

この7か条だけ守れば健康になると言った。そしてノイローゼは直さなくてはならない重要な問題だと言った。

雲のような人生

家に帰ると娘が、夕飯でしょ……？食べた……！お母さんは夕飯を召し上がりませんよ、2階に上がると女房が布団を被って寝ていた。どうしたんだ……という、頭が痛いよ……と言うので頭に手を当てると火の玉のようだ。私は驚いてどうしたのかね……という。今日集まりがあってソミョン喜楽で昼食をしていたら頭が痛くなり始めたので寝ていたが帰ってきたと言う。元来女房は健康で病院の世話になることはなかったが、年を取るにつれ時折行きはするが、若いときは健康で哲学堂で運命を見てもらおうと、ということなしに99歳までは生きるといわれ、私は心強く生きてきた。

女房が健康なのでこの程度にでも生活しているが、病弱な女房だったら病院にお金を持っていきながら生活することになり、この程度に生活を送ることが出来なかったのだという思いを胸の中で噛みしめてみる。白寿といえば九十九歳を言う。百から一の字を取り除くと白の字になり99歳となるからだ。

健康で99歳まで生きられたら、こんな幸せがまたとあろうか……？と思っ、明け方1時に目が覚め女房の頭に手を当ててみると熱が下がっている、安心して暫くほかの事を考えていたが、時計を見ると3時を示している。1時から一寸の間に3時になったので2時間が稲妻のように過ぎ去ったのか……？と言う錯覚と現実との差は、人生10年を10分の1の1年の生存にたとえることは、1000年を10年とたとえるのと同じ歳月になるのだ。明らかに眠るのではなく、うとうとしていた私が認識できなかったのを錯覚したのに過ぎないのだ。忘却の時間は過去を認識せずに時間を短縮させてしまうのだ。それで雲のような人生と言うのだ。

馬鹿みたいに

何年も着ずに押し込んでおいた革ジャンパーを取り出し、内に毛をいれ、毛糸の首巻をして明け方 6 時に大通りに出た。薬局の前を通るとタクシーが止まり人が乗ろうとしていた。突然パンパン～～という音に驚いてみると、人が乗る最中だったが真後ろにほかのタクシーがくっついてクラクションを鳴らしているのだ。4 車線だから通り過ぎようとするれば通れるのに早く行けとクラクションをなぜ鳴らすのか……馬鹿みたいに～～～私は何も関係なく一人でぶつぶつ言いながら通り過ぎた。

寒い天気だ。トスカナ*を着たよりはずっと寒い。背中に入れたので暖かいが、手首と耳はずきずきと痛い。トスカナは手首にも毛があり、袖に手を通してても良く、ポケットの中にも毛があり暖かい。こんなことを考えながら聖堂の門を入れて行く。広い広場にはすでに乗用車が何台か来ていた。聖母像に十字架、そして本堂内に入れて行く。聖水をつけ、額に十字架、そして席に座る。いつも私が座る席は他の人が座っているので、その後の席に座った。

今日は日曜日……いつでも日曜日は暖かいオンドルに背中をつけて安らかに過ごすのだが、今日に限って友人と会って話しでもしながら過ごしたかった。こんなことを考えていても、時間が過ぎれば怠け心が起き温かい部屋が恋しくなると気が変わる。私も馬鹿みたいな男かもしれない。他人が皆やっているホームページを私は持たないでいて、何がうまく出来ると言って大きな事を言うのか？やはり馬鹿みたいに生きているようだ。

訳者注：*は羊皮の防寒ジャケットやコート。

泣き笑い人生

人は生まれるとき泣きながら生まれる。それから泣いて生きることが多く、次第に育ちながら笑うことを覚え始め、笑ったり泣いたりしながら成長する。大人になり年老いると泣きと笑いとどちらが多いか？といっても声を出さないと泣くことが多ければ、人生の表情が苦しく険悪なので、泣く表情に変わると

*

いうのだ。

人生において年を重ねて行き、寝ている忘却の世界では幸福だと見なしても、現実での泣いたり笑ったりする、辛かったり楽しかったりの切れ切れの時間はどちらが多いのか？だが、それぞれの人生には異なると言えるほどの大きな差はないのだ。平凡に、辛さと楽しさの分かれ道で、幸福を感じる人と不幸を感じる人の心の中では欲心が左右してどちらかに分かれる事件になる。一日三度の食事だけで生きていても幸福だと思って神様に感謝する人がいて、また大きく立派な高台の屋敷でも平生の不平があるのは、欲心から発するものだ。万一こんな人が一日三度の食事だけで生きていくことを感謝することを読み取ることが出来れば、分をわきまえることを知りうるのだ。

人生には事件が多く発生する。すべてが人と人との事件で、それでなければ突発事故なのだ。台湾を初めとして他の諸国で地震が起き、罪のない生命が多く失われたことがあった。人生は最善を尽くして生きて生きつつ、それ以上は天命に任せようと言う。だがこのような突発事故はどうしようもないことだが、自分が起こす不幸の鍵は最善を尽くして保管しなければならない。親身の兄弟のように過ごした人が突然仇敵になることが多い。事情により手伝うのは良いことだが、生活手段を超える損害は、初めから自分を滅茶苦茶にする形になる。だから人と人とは良い間柄より悪い間柄が多いと見ればよい。人と付き合うのに、自分の考えに合わないと思えば薄情に断ってしまわなくてはならない。そうすればこそ淵に落ちることはないのだ。

私が目を覚まし時計を見ると1時だ。それから、思い出すことが走馬灯のように頭を乱し眠気が覚めた。暫くすると2時になった。机の上の明かりを消して人生を回想して過ぎた日とこれからの日を考えてみると、幾らも残っていない私の人生は果たしてどうなるのか……？と思った。過ぎた私の人生は、今まで他人のために生きて来て、他人に良いことばかりして、私は何時も損害を受けただけで疲れ果て、家族を苦勞させてきただけの経歴だ。私があのに行けば私の倉庫があるのだ。飢えることなく過ごすことが出来るようになるのだ、と考えると気持ちがせいせいする。

今日ももう暮れて行くようだ

21世紀になり10日が過ぎ、また1日の11日が既に暮れかけている。稲妻のように速い時間だ。今日1日は毎月出会うの場所となっている某食堂で昼食をし、酒一杯飲んで出ると、太陽が西方に傾き夕闇が迫っているなあ。惜し

い時間……！余りに速く命を奪って行こうと胡坐をかいている悪魔のようなあの世の死者……気になる約束者……だがこれから先のことは天に任せることにしたので心配することはない。人間と人間同士が出逢って話をする出会いの場所は楽しくなくてはならない。

会ってみんな自分の自慢をすれば、話の面白みがなくなってしまう。お金の自慢をするのもうんざりだ。興味のある話と言うものは本当はない。だが実話で人を感動させるはなしは有益な話だ。そして興味をを起こさせる。会えば、お金を大儲けして横柄であるとか、他人を謀略に掛ける言辞は良くない。

昔、社長または局長が集まって夕食をとるとき、地位の高い人達は酒席で焼酎を飲むが、運転手は主人または上司のお陰でビールを飲んで、主人公達と人数が同じなのに食事の値段がうんと高い、ことが数多くあった。みんな分別をわきまえない両班達……本当に情けないことが多かった。それを知っていても恨みもしないで小さい声で口から出す程度だった。こんなことあんなことすべて過ぎ去ったこと、これから先の日の時間はだんだん速くなりつつ……。

婆だとは

久し振りに友達と会った。楽しい話の中で彼は自分の女房のことを「うちの婆」といった。どういうことだ……少し前まで可愛いお嬢さんだったのに早くも婆になったのか……？私とは8歳下のこの友達は快活に笑いながら子供達がみんなソウルに住んでいるので彼の女房はソウルにいると言う。

私は自分が気分の良いときは女房を呼ぶとき「お嬢さん」と呼ぶ。すると気分よく「はい」と答えるのを見ると、気分を悪くする呼称はいけないなと思った。老け込んだ女房も若く可愛い名前でもらえば気持ちだけでも若くなる。

更にそのことは、その友達が昔結婚していくらも経たない時節と一緒に勤務した友達なので、私がこういっても事実だから実感のある話だ。流水のごとき歳月だと言うのは昔の話で、今は矢のごとき歳月と言うのだと言う。歳月が更に速くなる近頃では、その代わりに、前には70歳でも古希だと言って稀な年だったが、100歳人生なら変えねばならない。だが歳月が余りにも速く、70歳のときよりももっと短い気分なのだ。女房が年取って死ぬまでお嬢さんと呼んでやろう……。